
僕達の学園生活

蕪霧博士

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

僕達の学園生活

【Nコード】

N2969P

【作者名】

蕪霧博士

【あらすじ】

一般的な学園生活。
姉妹がいると大変です。

設定（前書き）

初投稿。

下手ですが誤字脱字ありましたらお知らせください。

今回は設定です

設定

静香総合学校

中学と高校がひとつにまとめてある、極めて珍しい学校である。五階建てで、きちんと仕切つてある。一～二階までが中学生で、四～五階までが高校生となっている。

・一階 1 - 1 1 - 2 2 - 1 2 - 2

・二階 3 - 1 3 - 2

・三階 理科室、家庭科室、音楽室、パソコン室、図書室、職員室、相談室、保健室、放送室など

・四階 1 - 1 1 - 2 2 - 1 2 - 2

・五階 3 - 1 3 - 2

校庭はグラウンドとなっており、運動会や体育の時に使用する。体育館も敷地内にあり、雪の日や雨の日に使用する。

冷暖房完備しており、エレベーターも設置されている。

学校のすぐ近くには売店専門の店があり、メニューも比較的豊富だ。

山吹家から学校の道程には、本編に出てくる木々の通学路の他にも色々ある。

・バス停

会社に行くサラリーマンや学生を乗せるために沢山配置されている。駅方面と学校方面とあるが、土地の都合上必ず学校前も入っている。で、遅刻しそうな場合バスに乗ったりする人がいる。

・駅

大型の駅でホームが沢山ある。空港行きの電車や新幹線もあるので常に人が多い。

・総合国民公園

かなりの広さを誇る公園。遊具などが沢山揃っていて、休日になる

と子供を釣れてきた親が沢山いる。

そして季節毎にイベントを行なっている。

春には、花見を満開になってから一週間開催。沢山の売店が並び、毎日のように盛り上がっている。夏には、流しソーメンや昆虫取り、そして最大規模と言われる花火大会を開催。秋には、キノコ狩り（専門の人指導）や松茸狩りを開催。冬には、雪合戦やスケートなどを開催している。

・山

すぐ近くに山があり、夜には夜景が綺麗でカップルの間での人気スポットになっている。

登場人物

やまぶきゆういち

山吹祐一

普通の健全な男子高校生。

成績は赤点に何とかならないレベルで満足している。性格はいたって真面目。

姉によくパシリ使われているため、運動神経は良いらしい。

やまぶきりゅうか

山吹瑠花

怜琉の姉で、同じ高校に通っている。

成績は優秀でリーダーになりたがる。祐一によく勉強を教えているが、瑠花から言わせると「アイツはパシリくらいにしか考えてない。勉強を教えるのは、パシリを続けるための餌みたいな物」と、本人談。

よくパシりにされているのをクラスの人が目撃している。

やまぶきちはる

山吹茅春

怜琉の妹で、同じ中学に通っている。

成績は良くも悪くも無く中間くらい。

瑠花が怜琉をパシりに使うのが気に入らないため、怜琉を色々と支えている。

さいとうゆき

佐藤佑樹

怜琉の友達でいつも何かしらいる。運の悪いことばかり起こっているの、知っている人からは悪運の持ち主や、悪魔に囁かれた変人とも言われている。

今日から新しいスタート！

四月と言えば、入学や進学シーズンを思い出す方も多いのではないだろうか？

こちらでは、入学シーズン真っ盛りです。辺り一面桜満開になっていて、カメラ片手に息子や娘を撮る父や、母の姿も学校の前で見ました。

最初の物語は、あの三人の入学シーズンの出来事です。

季節は春になり、暖かな空気に包まれて眠たくなる日々です。

「あゝいい季節だな……」

「そうだね、お兄ちゃん」

朝食を食べ終えたが、登校するにはまだ早いので、庭に植えてある立派に育った桜の木の下で寝ころび、茅春と一緒にくつろいでいた。

「こらっ祐一と茅春！ あんまりくつろいでいると、遅刻するわよ！」

「もうそんな時間か。分かったよ、行くぞ茅春」

「ごめんなさいお母さん」

睡魔が襲っていたが、今日は高校の入学式だ。いきなり遅刻して恥をかくのはごめんなので、仕方なく学校に行く支度をする。

すぐに出れるように服は着替えてあるので、玄関に行くだけだったけどね。

「いつてきます」

「いてきまー」

二人の声が微妙にハモる。茅春が言葉を略しているのはいつものことだ。

一度注意をしたことがあったが、何回言っても治らない。癖になっているようなので最近は諦めている。

母さんは家事や仕事の準備などで忙しいから返事は返ってこないけど、それが日常となっている。

外に出て改めて季節は春だと実感させられる。通学路にある木々は桜満開になって花びらが風に揺らぎ、何かいい匂いがするような気がする。

「うー眠いな」

「そだね…… やらないと決めてもついやってしまう誘惑！まさに悪魔の囁きだよ！」

「 どんな囁きなんだ？ 」

「んとね、『ほら、学校何が行かないでここに居ようよ』みたいな感じで」

「そうか、とりあえず眠くてフラフラする」

そんなくだらない雑談をしながらボーっとして歩いていた時だった。

「何ぼーっとしてんの！ しっかりしなさいよ祐一！」

後ろからの声にびっくりし、転けそうになり思わず膝をつく。

「痛っ…… 何するんだ」

「フラフラしながら歩いてるからよ」

「おかげで目が覚めたからいいけどさ、いきなり怪我して入学式とか、恥ずかしいだろ」

「フラフラして怪我されても困るから注意してあげたんだからね！私先行くから、また後でね」

隣で茅春は僕のことを心配して声をかけてくれたが、瑠花は正反對の性格だ。

本当は心配してくれてるんだけど、表には出さずにきつく言う。だけど、パシリなどに使われている時の顔は怖いので理解出来ない。僕は貴方の奴隷じゃないと目の前で言いたい、何されるかわか

らないので言えない。

姉妹でこんなにも性格が違うのは、永遠の謎になりそうだ。

「お姉ちゃん乱暴なんだから……大丈夫、お兄ちゃん？」

「大丈夫だって、膝ついただけだから」

「それならいいんだけど……何かあったら私に言ってね」

「ありがとう、助かるよ茅春」

瑠花とは反対に、茅春は心配してくれるいい子だ。

何かしら支えてくれたりしてくれるので、茅春と一緒にいると楽しいし安心出来る。

「何でお姉ちゃん急いでたのかな？」

「あれだろ？ 琉花は生徒会だからな。色々と忙しいんだろ」

「なるほど」お姉ちゃんはいつも忙しいのは、そんな理由だったんだね」

今日から新しいスタート！！

家から学校までは、歩いて五分くらいなので遅刻は全くしないが、ゆつくり歩くのがいつもの日課になっている。

茅春との会話が楽しいし、景色を見ながら歩くのも中々楽しい。通学路には木々が植えてあって、一年中季節の変化を楽しませてくれる。

春には、桜の花が満開で見た目にも綺麗だ。花見出来るくらい（庭に桜があるのでやらないけど）なので、ちよつとした観光スポットになっている。

夏には、青々とした葉っぱが生えていて、蝉がうるさいくらいに鳴いている。木陰が続くので、周りよりも涼しくよく遊びに行く。

秋には、茜色に染まった紅葉の葉が一面に広がる。散った葉っぱは掃除が大変なので嫌いだが、何と言っても枯れ葉を集めて作る焼き芋が最高に旨いので仕方ないか。

冬には、辺り一面が銀世界に包まれる。木々に積もる雪は風情がある。自分で言うのも恥ずかしいけど。たまに通学している時に雪の固まりが降って来て頭に当たるのは笑ってしまうけど。

「うわっ！ やっぱり人多いな」

「そだね、一年に一回の行事だからね」

「俺は高一、茅春が中一、瑠花が高二になるのか」

「うんうん、高校生活のスタートだよ、お兄ちゃん！」

「茅春こそ中学生生活のスタートだろうが」

思わず苦笑いしながらツツコミを入れる。

「あ、……そうでした」

てへつと舌を出しながら、頭を軽く叩くふりをする茅春。漫画でしか見たこと無い動作だが、意外と可愛かった。

「中学生からは難易度上がるから気をつけろよ。まあ俺にも言える話だけ」

「はー……嫌だねえ」

「はー……嫌だな」

お互い深いため息をつく。ここの勉強は難しいと評判の所だ。しかし、基礎からしっかりしてれば大丈夫。

この場合は、基本の応用や前の学年で習ったような問題が多いからだ。

「二人共、何深いため息ついてんだ？」

後ろから声をかけられて思わず振り向く。

「えっ？」

「知ってるのか茅春？」

「いや、知らないよ」

「おい！ 俺様の名を忘れては困るな。佑樹だよ」

「あの悪運の持ち主だっけか」

「違うでしょ、変人じゃなかった？ お兄ちゃん」

「そうだったけ？」

「お、おまえら……言いたい放題いいやがって」 茅春のボケに上手く付き合い佑樹をからかう。

「はあ……何故朝っぱらからへこまなきゃいけないんだ」

「その割には元気そうに喋っているな」 佑樹の口はニヤニヤと表現出来るくらいに緩んでいる。

「おう！ なんせ俺はドえ　ぐふっ……」

「それ以上言うなよ」

佑樹の変態っぷりを語られる前に、軽く腹を殴って少し黙らせてもらった。前油断して喋られた時には、三十分間ノンストップだったので、学習した。喋らせる前に黙らせると、嫌な生活の知恵だ。

「あいつは無視して行くぞ茅春」

「えっ……う、うん。大丈夫かな佑樹君は」

「大丈夫だ、問題無い。あいつの顔見れば分かる」

まだ殴ったのが効いているのか地面に倒れていたが、佑樹の顔は何故か嬉しそうな喜んでいるような感じだ。

「なら問題無さそうだね」

「だろ？ さて、今日はそこそ忙しいから、早く行くぞ」

茅春と雑談しながら歩いて行く姿を、一人の男が眺めていた。

「……お二人さん、僕を忘れていませんか……」

見捨てられ寂しそうに叫ぶ男の声が、響いた。 ような気がする。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2969p/>

僕達の学園生活

2010年12月11日00時20分発行